多文化社会におけるベール着用と学校教育

── レバノンのシーア派系学校でおこなわれるアッタクリーフの儀礼に着目して ──

The Meaning and Educational Effects for
the Ceremony of “Al-Takhlif” in the Multicultural Society, Lebanon

三　尾　真　琴

Makoto MIO

1　はじめに

公的空間におけるスカーフ（ベール）着用の是非が，ヨーロッパ地域を中心に，近年，社会的な議論を呼んでいる。例えば，公教育の非宗教性を原則とするフランスでは，学校で宗教的帰属を示す標章や服装を禁じた「宗教スカーフ禁止法」が2004年９月から施行され[1]，また，言語を基盤にした分権的教育制度がとられているベルギーでは，2001年９月の「同時多発テロ」以降，一部の公立学校でムスリム女子生徒にスカーフの着用をやめるよう通達が出される[2]など，スカーフ着用に対する規制が強まりつつある。他方，1923年の建国以来「世俗主義政策」がとられてきたトルコでは，2002年に発足した公正発展党（AKP）の政権下，公立学校の教師や女子生徒に対するスカーフ着用を容認する議論が広がりをみせている[3]。このように，学校空間におけるムスリム女性のスカーフ着用問題はイスラーム信仰という概念にとどまらず，ホスト国における国民教育のあり方，ムスリム移民の社会的権利，表現の自由，女性の人権やイスラーム復興を含んだ政治的要因と結びつく傾向を示している[4]。

レバノン共和国（以下，レバノンと称する）は18の宗派が公認される多宗教社会である。また，他のアラブ諸国に比べキリスト教徒の割合が高く[5]，フランスによる委任統治（1920-43年）を経験し，独立後，欧米への開放政策を推進したことから，欧米の価値観ならびにキリスト教の文化的影響を残した社会でもある。ベイルート東部やアンテリアス（Anteliias），ジュニエ（Junie）などキリスト教徒が多く居住する地域では，若者の服装は欧米のファッションとほとんど変わらなく，同様のファッションを好むムスリムの若者も少なくない[6]。

その一方，男女別学を基本としベール着用を制服とするなどイスラーム的価値を重視する学校も，シーア派系を中心に，多数存在する。シーア派は永らくレバノン社会で周縁に置かれていたが，1990年の内戦終結後，政治・経済分野で伸張を遂げている。学校教育でもアマル（AMAL）やヒズブッラー（Hizbullah）といった政党や宗教指導者の組織を中心に多数の学校が建設され，彼らの歴史認識や政治的志向，信仰が学校教育に反映されている[7]。これらの学校のなかには，ベール着用を女子生徒に課しているところも少なくない。その対象年齢は初等課程４年に相当する９才であ

る。多宗派で構成され，欧米文化をはじめ，さまざまな文化が混在しているレバノンにあって，シーア派系学校ではどのように9才の女子生徒にベール着用の意義を理解させ，日常化させるのであろうか。

本稿は，レバノンでのフィールド調査（2003年8月，2004年5月，2005年1月）で得られた知見をもとに，アッタクリーフ（Al-Takhlif）の儀礼に着目する。アッタクリーフの儀礼はホメイニ時代のイランで始められ，その後，レバノンのシーア派系学校に導入されたものである。本儀礼がレバノンとイランでどのように位置づけられているのか，また，同儀礼が多文化社会レバノンでどのような役割を果たし，教育学上，どのような意義を有するのかを論じる。

なお，以下本稿では，女性の頭を覆う布を「スカーフ」ではなく「ベール」と呼称する。頭を覆う布は『コーラン』でも示されているように女性の美を他人からみえなくする（その結果，女性を保護する）という意味をもつ。すなわち，ムスリム女性の頭を覆う布は，本来，ファッション性よりも隠すことを目的としたものであることから用語上もその意に沿った「ベール」とした。

2　多文化社会を映す学校教育

レバノンは1943年にフランスの委任統治から独立を果たした。しかし，委任統治をとおして，フランスから政治的，社会的，文化的に多くの恩恵に与ったキリスト教徒の多くは独立後もフランスとの連携を強く望み，他方，スンナ派住民はシリアとの統合を願い，国内は混乱した[8]。そうした宗派間の分裂の危機に際して採用されたのが「宗派主義」であった。宗派主義は宗派を社会の核として，国会議員や主要ポストの割り振り，公務員採用などの基盤となる統治システムとしての性格をもつ反面，公認宗派に婚姻・離婚，養子縁組など私法分野における宗教法の適用，学校運営の権利と宗教教育の自由など文化面での広範な自由を認める性格をもつ。このように宗派主義は宗派を単位とするコミュニティを活性化させることに寄与したが，宗派間の利害対立，外部勢力との結びつきを助長させることになり，統合システムとしては十分機能していない。レバノンの多文化社会は多宗派という物理的要因に宗派主義という制度・政治的要因とが加味され，宗派の広範な自治権に対する政府権限の相対的弱体化という構造として具象化されているのである[9]。

その代表例のひとつが学校教育である。中東アラブ諸国では，一般に，中央集権的な教育制度がとられ，その中核が公立学校である[10]のに対し，レバノンでは多くの宗派が自派の学校を設立し，運営にあたっている。しかも，私立学校に通う生徒数は全体の65%を占め[11]，私立学校が学校教育の中核をなす。また，宗教系学校をはじめ私立学校には広範な「教育上の権利」が認められ，宗教教育の提供にとどまらず，独自のカリキュラム編成や教科書の選定にもおよんでいる。教科書も宗派間の歴史認識や価値観を反映した内容になっており，サフィア・アントゥン・サーデ（Safia Antoun Saadeh）は，「私立学校に認められた教育上の自由は，倫理観，歴史認識，文化にまでおよび，場合によっては，ある私立学校の教授内容が別の私立学校とはまったく異なっているケースもあった」と指摘する[12]。

レバノンの近代学校は，オスマン朝下の十九世紀の初め，フランス，イギリス，アメリカなどのキリスト教宣教団が簡単な読み書きを教える教育施設を開設し，フランス委任統治時代に諸制度が整備され，拡大していった[13]。現在でも委任統治時代に，フランス政

府の支援を受けたキリスト教系学校が教育の面でも学校数においても優位にある。例えば，カトリック系のカレッジ・ドゥ・サクレクール（College du Sacre-Coeur），エコール・サジェス（Ecole Sagesse），ギリシャ正教系のエコール・ザフラ（Ecole Zahrat）とセント・メリーズ・オーソドックス・カレッジ（Saint Mary's Orthodox College）などは100年以上の歴史を誇り，教育面でも高い評価を受ける伝統校である。キリスト教系学校以外では，スンナ派最大の組織であるマッカーシード（the Moslem Society of Benevolent Intentions）[14] などスンナ派系学校が続く。これらの学校はアメリカ大学（the American University of Beirut）やサンジョゼ大学（the Universite Saint Joseph）など有名大学へ多数の合格実績を誇り，卒業後は，政界・経済界への進出，中央官僚などへの就任など，エリート校として位置づけられている。ちなみに，現レバノン大統領である（2007年7月現在）エミール・ラフウド（Emile Lahoud）はカレッジ・ドゥ・サクレクールの卒業生の一人である。

キリスト教系私立学校が優位にある構図は，現在でも，基本的に同様であるが，学校教育における信仰のあり方は幾分変化が生じている。設立当時，キリスト教系学校は教科学習の他，聖書理解や教会活動などの宗教教育に力を注いでいた。キリスト教系学校で学んでいた女性ムスリムが賛美歌を歌わされたとしてムスリムコミュニティで問題になったことがあるほどである[15]。現在，キリスト教系学校には多数のムスリム児童・生徒が学んでいるが，受け入れについては一定の配慮がなされている。例えば，前述のカレッジ・ドゥ・サクレクールではムスリムが全生徒の約30%を占め，セントメリーズ・オーソドックス・カレッジでは約50%を占める。両校ともムスリムに対して宗教（キリスト教）の授業を免除している[16]。

学校教育と信仰との距離をおく，いわゆる，世俗的傾向はキリスト教系学校だけが有しているのではない。例えば，スンナ派系の主要学校である前述のマッカーシードの他，前首相のラフィック・ハリーリ氏[17] の財団が運営するハリーリ・スクール（Hariri School）もそれに相当する。両学校とも男女共学であり，ベール着用を制服とせず，生徒と保護者の任意にしている[18]。レバノンではシーア派系学校と一部の保守的なスンナ派系学校[19]を除き，基本的に，世俗的な教育方針を取り入れようとする宗派系学校が増加している。

キリスト教系やスンナ派系の主要学校が一般に世俗性を目指す傾向にあるのに対し，後述するように，イスラーム性ならびにシーア派の歴史認識や特定の政治的志向を重視するシーア派系学校が存在する。私立学校に認められた広範な教育の自由と世俗性をめぐるギャップはレバノンの多文化構造を象徴するものであり，換言すれば，国民統合を目指しながらも十分な成果が得られないレバノン社会を映す鏡でもある。

3　シーア派系学校の特質とベール着用

フランス委任統治下，多くの宗派系近代学校が建設された。しかし，政治，経済，社会などの分野で周縁におかれていたシーア派は学校教育でも対応が大幅に遅れた[20]。そのシーア派に転機が訪れるのは内戦終結前後である。シーア派は，イランやシリアの援助ならびに民兵組織としての武力を背景に政治的発言力を増し，マロン派とスンナ派の二大宗派に匹敵する主要な宗派として位置づけられるようなった[21]。1970年代以降，ムスタッファ系[22]やアマル系[23]，ヒズブッラー系[24] など，多くのシーア派系学校が開設されていった。こ

のようにレバノン内戦終結前後に，シーア派の政治的影響力が増大するのに伴いシーア派系学校組織も設立されていった。これらの学校組織はその後も学校運営を拡大し，シーア派系学校のなかで中心的な役割を担っている。

シーア派に対するイメージは「イスラーム急進派」「教条主義」「テロリスト」など否定・消極的な評価が一般的であるといってよい。桜井は，ホメイニ師を指導者とするイラン・イスラーム共和国は，西側の論理とは相容れない「イスラーム原理主義」国家イメージが原型となっており，そのようなイメージはさほど変化していないと指摘する[25]。また，レバノンでは，もともとシーア派の民兵組織であったヒズブッラーが，主に，1980年代におこなったハイジャックや要人の誘拐などの活動[26]により欧米より否定的に見られてきた。最近の例では，2001年９月11日に米国で起きた「同時多発テロ」に関して，PFLP（パレスティナ解放人民戦線）やハマス，パレスティナ・イスラーム聖戦などとともに「テロリスト集団」の一つとして名指しされ，米国政府により銀行口座が凍結された[27]。また，ヒズブッラーがアル・カイダのメンバーをかくまい，軍事訓練をおこなっているとの報道もなされ[28]，現在でも欧米諸国の一部から「危険な組織」と警戒されている。

学校教育はどうであろうか。彼らはパキスタンなどでみられるイスラーム教育に特化したいわゆる「イスラーム神学校」を目指しているのであろうか。確かに，イスラーム信仰を教育内容に取り入れ，それらの価値観を指標として学習指導・生徒指導にあたっている学校も少なからず存在する。しかし，その反面，シーア派系学校は，それらの学校も含め，外国語教育を充実させ，コンピュータ施設を整備し，全国統一テストであるブレベーやバカロレアの合格率を誇りにする。これらの状況から判断すれば，大半のシーア派系学校はいわゆる「進学を目標に掲げる近代学校」の範疇である。また，イスラーム信仰，歴史認識，政治的志向，地域との関わりなどを切り口にしていくつかのタイプに分類することが可能であり，「シーア派系学校」を固有で特定の意味をもった存在として一括りにはできない[29]。

(1) ベールの着用

シーア派系主要学校における女子生徒のベール着用状況は表１のとおりである。ベールの

表１　シーア派系主要学校におけるベール着用

学校	アーミリーエ	ジャーファリーエ	マバラート
設立	1923年	1938年	1977年
ベール	着用義務なし	着用義務なし	着用義務（制服）あり 初等課程４年から
男女別学 （共学）	共学 2000年度から段階的に	共学	別学 前期中等課程１年から

学校	ムスタッファ	アマル	ヒズブッラー
設立	1984年	1986年	1992年
ベール	着用義務（制服）あり 初等課程４年から	着用義務なし	着用義務（制服）あり 初等課程４年から
男女別学 （共学）	別学 初等課程４年から	共学	別学 初等課程４年から

＊現地調査にもとづき筆者作成

着用が制服として義務化されているのはヒズブッラー系とマバラート系[30]ならびにムスタッファ系学校である。これらの学校では，初等課程4年の9才からベール着用が実施されている。また，これら3学校組織では男女別学が実施されている点でも共通している。

9才という年令の根拠は，1979年のイラン革命を主導し，最高位の法学者であったホメイニ師によるものである。彼はムスリムの成人年令を聞かれた際，「女性は9才から（成人の）ムスリムとみなす」[31]と答えたといわれている。

他方，ジャーファリーエ[32]，アーミリーエ[33]，アマル系学校ではベール着用が制服とはされず，その着用は保護者ならびに生徒に任されている[34]。また，これらの学校では男女共学である。

ヒズブッラー系，マバラート系ならびにムスタッファ系学校は，宗教の授業や預言者ムハンマドの生誕ならびにアーシューラー[35]などの学校行事においてベール着用の意味とムスリムとしての義務を教え，かつ，ベール着用を制服とすることでイスラームの日常化を図ろうとしている。これらの教育活動に加え，上記3学校組織ではベール着用が課せられる4年生の女子生徒が主人公になり祝福を受ける行事を企画し，成人ムスリムとしての啓蒙活動に努めている。その行事はアッタクリーフと呼ばれるベール着用儀礼である。

4　アッタクリーフ儀礼の内容

アッタクリーフ（Al-Takhlif）とはアラビア語で成人ムスリムとしての義務を果たす年令に達したことを指す。ホメイニ師の言説に基づき，女子生徒は9才になると成人ムスリムに達したとみなされ，その年令を迎える年に儀礼がおこなわれる。

(1)　イランにおけるアッタクリーフの儀礼[36]

アッタクリーフの儀礼は，イラン革命後の1980年代，ホメイニ師の提唱によって公立学校ならびに私立学校の一部で始められた。本儀礼は教育法令等に規定されている訳ではなく，イラン政府からの「指示」という形態でおこなわれる。ホメイニ師に基づき，9才になった女子生徒が成人とみなされ，儀礼の対象となる。儀礼の日程は特定の日が奨励されることはなく，学校によって異なる。儀礼は，一般に，昼休みの礼拝の時間を利用しておこなわれ，女子生徒は日常着用している制服で参加する。基本的に宗教の教師が儀礼を担当し，学校・宗教関係者ならびに保護者は参加しない。儀礼は20分ほどで終了し，その後お菓子が生徒たちに配布される。1980年代にはセレモニー的要素が取り入れられていたが，保護者や教師から疑問の声があがり，現在のような，簡素な儀礼となった。

(2)　レバノンにおけるアッタクリーフの儀礼

ベール着用を課しているヒズブッラー系，マバラート系，ムスタッファ系学校でアッタクリーフの儀礼が学校行事の一つとしておこなわれている。3学校組織とも，アッタクリーフの儀礼はファーティマの誕生日前後におこなわれることが多い。ファーティマは預言者ムハンマドの娘であるとともに，シーア派初代イマーム・アリーの妻であり，シーア派信仰においてもっとも尊敬される女性の一人である。宗教の時間やアーシューラーの期間中，ファーティマの名は賞賛され，ムスリム女性が目指す女性として位置づけられる。

アッタクリーフ儀礼の起源は，前述のとおり，革命後のイランにあり，1980年代にムスタッファ系組織によってレバノンに導入されたといわれている。その後，本儀礼を導入する学校が増え，儀礼の内容も演劇的要素が加

わり盛大なものになった。筆者は，2005年１月６日にムスタッファ系学校が主催したアッタクリーフ儀礼への参加を許された。

（儀礼の内容）

１月６日（木）の夕方６時に指定されたムスタッファ系の女子学校に向かう。本学の演劇用ホールが会場として使用されており，すでに学校関係者，宗教指導者などの来賓，保護者の大半が着席していた。生徒１名につき２名の保護者が招待されている。ベイルートにある同系列の学校との合同開催の形式をとり，参加者は400名ほどである。まず，学校の代表者が壇上にあがり，謝辞とともに開会を宣言する。その後，会場全体が明るくなり，音楽が流れるなか，舞台中央に水色あるいは薄紫のイスラーム服に身を包んだ「主役」の女子生徒が二人一組になって紹介される。水色・薄紫いずれのイスラーム服にも白いレースが施された特別な衣裳である。当日，124名の女子生徒が紹介された。

４年生の女子生徒の代表が歌を交え，ベール着用にまつわる故事を紹介した後，教職員，在校生などによる演劇がはじまった。その内容はこれまで筆者がそれぞれの学校で鑑賞したベール着用にまつわる故事を演劇に仕立てたものとは異なり，2004年にフランスで採択された「宗教スカーフ禁止法」を痛烈に批判・非難する政治色の強い内容であった。フランスを連想させる国の学校でベール着用を理由に女子生徒（ムスリム）が逮捕され，その是非をめぐる法廷劇であった。女子生徒を追い込む検察官，女子生徒に対し不利な証言をする証人はすべて風采・態度から「悪人」と判別できるキャストであった。最終的に，被告人には有罪の判決が下るものの，多くの女児や女子生徒がベール着用の意義を訴え，今後も着用し続けることを高らかに誓って幕が下りるという内容であった。

その後，ヒズブッラーの来賓がベール着用の意義を訴え，フランスの「宗教スカーフ禁止法」を批判する内容を中心に祝辞をおこなった。最後に，学校関係者，来賓が壇上に立ち，女子生徒一人ひとりに『コーラン』と礼拝用の絨毯，記念品（文具）が手渡され，アッタ

写真１　イスラーム服を着用して紹介を受ける女子生徒たち

写真２　教職員や在校生による演劇

写真３　祝福され記念品を受け取る女子生徒

＊2005年１月筆者撮影（ムスタッファ系学校にて）

クリーフの儀礼が終了した。筆者が関係者にお礼を言って会場を出たときにはすでに午後８時30分になろうとしていた。

アッタクリーフ儀礼の構成は，３学校組織ともほとんど同じである[37]。イスラーム服に身を包んだ４年生の女子生徒が主役で，宗教指導者や学校関係者に加え，４年生の保護者が２名招待される。ベールに関する劇は教職員と在校生中心でおこなわれる。来賓の祝辞の後，４年生の女子生徒に『コーラン』と礼拝用の絨毯ならびに記念品が贈呈されるというものである。

⑶　シーア派系学校におけるアッタクリーフの位置づけ

アッタクリーフの儀礼を実施していたヒズブッラー系，マバラート系，ムスタッファ系学校のなかで，ヒズブッラー系とムスタッファ系学校は，学校案内に本儀礼の様子を写真入りで載せていた。ムスタッファ系では主要な学校行事としてアッタクリーフの儀礼が位置づけられ，「成人ムスリムとして責任を果たす年令に達した女子生徒への組織的なお祝いである」と紹介し，2001年には325人が祝福されたと記述されている。

筆者は，ヒズブッラー系ならびにマバラート系学校で10数名の女子生徒にベール着用に関する話を聞く機会があった。彼女たちは，「ベール着用はイスラームの伝統だから」，「美しくみられるから」，「成人ムスリムとしての証であり，誇りであるから」「女性としての特権が与えられているよう」など，ベール着用を肯定的に受け止めていた。

5　結語

2006年７月に勃発した対イスラエル闘争で，広く名をはせる存在になったヒズブッラーは資金や武器などの援助，政治的志向などの点でイランとの強固な結びつきが指摘されている。確かに，ヒズブッラー系学校やヒズブッラーと良好な関係にある学校組織では，応接室や教室にホメイニ師や現最高指導者のハメネイ師の肖像画が飾られ，歴史の授業では反米・反イスラエルの歴史観が教えられる[38]などイランとの一体性が感じられる場面も少なくない。しかし，イランから導入されたアッタクリーフの儀礼は，内容だけでなく，儀礼のねらいや位置づけそのものが異なっている。イランの場合，本儀礼は通常の昼の礼拝の時間におこなわれるのに対し，ヒズブッラー系やマバラート系，ムスタッファ系学校の場合，特別なイスラーム服を着用し，学校関係者や保護者から祝福され，成人ムスリムのための贈り物が準備されるなど，緊張と興奮をともなう，非日常的学校行事の代表といってもよい。また，これらの学校の場合，儀礼の時間が拡大され，演出が華美になる傾向にあるのに対し，イランでは以前に比べ儀礼色が薄められる傾向にあるのは対照的である。

両者の相違の背景にあるのは何であろう。第一に，社会における宗派構成の相違が考えられる。イランではシーア派（十二イマーム派）が全人口の90％を占める[39]のに対し，レバノンではシーア派が第一位ではあるが全宗派の30％程度を占めるにすぎない。すなわち，イランではシーア派としてのアイデンティティの混乱や喪失が起きる可能性は低いといえるが，レバノンでは，宗派構成や人口比率の点からも，西洋・キリスト教の影響が色濃い文化面からも，アイデンティティの葛藤につながる危機意識はイランより高い。宗派としての組織力が十分でなく，多くのシーア派青年がキリスト教系組織に長年にわたり動員されていたことがそれを示している[40]。第二に，近代教育に従事した経験の差ならびに変革からの時間の差が考えられる。イランの場

合，1850年代に西洋を範とした近代学校が建設され，いわゆる世俗教育が初等，中等教育にまで及んだ[41]。1979年の革命後は教育のイスラーム化が進められ，教育諸制度ならびに教科書が改訂された。当初は革命の熱気と達成感から学校現場でもイスラーム化が過度に進められていたものが，アッタクリーフの儀礼を例にすれば，その意義や必要性について冷静な判断がなされるようになったと考えられる。他方，レバノンのシーア派は，内戦前，学校教育においても十分な予算が与えられず，識字率は宗派のなかでもっとも低い状態に置かれていた。加えて，スンナ派からは「イスラームの異端」と呼ばれ，モスクへの出入りを規制され，アーシューラーの儀礼を禁止されるなどさまざまな差別を経験してきた[42]。そのシーア派が，1990年の内戦終結後，大きな変容を遂げ，宗派主義のもと，広範な教育上の権利を行使できるようになった。シーア派としての独自の教育が可能になって10数年が経過したにすぎない。ヒズブッラー系，マバラート系，ムスタッファ系など独自の教育をおこなう学校がシーア派とは異なる価値観をどの程度受け入れ，国民統合に向けてどのような教育方針をとるのか，その評価には今しばらく時間が必要である。

上記3学校組織ではアッタクリーフの儀礼が盛大に執りおこなわれ，近年，本儀礼を導入する学校が増加している。主人公になる初等課程4年の女子生徒は日常では着用することのない特別なイスラーム服を身につけ，スポットライトを浴びながら壇上で紹介され，保護者や宗教指導者，学校代表者などから成人ムスリムとしての祝福を受ける。対象の女子生徒は，ベール着用を祝福の象徴として経験する。また，上級生が祝福される様子を見た下級生は，次年度以降，自分たちの参加を心待ちにする。このように，アッタクリーフの儀礼は，ベール着用を服装規定として日常化させることや宗教の時間にベール着用の重要性が教えられるのとは異なり，女子生徒自身が直接ベール着用の意義と成人ムスリムとしての位置づけを実感できるという点が特徴的である。

また，アッタクリーフの儀礼には別の教育効果が見出せる。ホメイニ師が提唱した「9才」という年令の根拠は問答集に記述されていない。彼の母国であるイランではイラン・イスラーム革命後，初等課程1年より女子生徒にベールを義務づける制度が導入されている[43]が，レバノンで初等段階の1年からアッタクリーフの儀礼を実施した場合，成功裡に導けたであろうか。学校生活に慣れ，シーア派信仰の意味がわかり始め，性徴があらわれ女性としての意識が芽生え始める年令に経験する非日常的な祝福は，9才の女子生徒にとって大きなインパクトになるであろう。また，下級生は日頃から面識のある上級生が祝福され，儀礼以降，ベールを着用して通学する姿に，来年以降の自分の姿を自然に投影することができるであろう。身近な上級生の変化をとおして自分の具体的な未来を理解することができることが儀礼の継続と一定の成果につながっているのではないか。

「伝統」は当該集団に属する人々に説明を要せず，行為の継続を当然視させる有益なツールである。エリック・ホブズボウムは，『創られた伝統』のなかで，「創り出された伝統は，通常，顕在と潜在とを問わず容認された規則によって統括される一連の慣習および，反復によってある特定の行為の価値や規範を教え込もうとし，必然的に過去からの連続性を暗示する一連の儀礼的ないし象徴的特質である。事実，伝統というものは常に歴史的につじつまの合う過去と連続性を築こうとするものである」[44]と述べる。アッタクリーフと

名づけられたベール着用儀礼は，1980年代にレバノンに導入されたものである。学校行事として定着して20年程度であり，必ずしもシーア派の伝統的な儀礼とはいえない。しかし，ヒズブッラー系やマバラート系などのシーア派系学校ではベール着用をイスラームの故事と結びつけ，その正統性と意義を強調し，多くの支持を獲得している[45]。

アッタクリーフの儀礼は，実施する学校にとっても，イスラームやシーア派信仰を学校教育に取り入れる上で有用であり，生徒の募集についても信仰を重視する保護者に対して具体的に説明できるというメリットがある。アッタクリーフの儀礼は９才の女性ムスリムにベールを着用する喜びと日常性を実感させるツールとして，実施する学校には具体的な教育理念を発信する事例として重要な役割を果たしている。イランで始められたアッタクリーフの儀礼は，多文化社会レバノンにおいて，独自の意味が付与され，シーア派の伝統としてシーア派系学校のみならずコミュニティにおいて定着・発展していく可能性を秘めている。

（注）

1）「仏でスカーフ禁止法施行」『朝日新聞』2004年９月４日。

2）「ベルギーモスレム女生徒に屈辱感」『朝日新聞』2002年９月２日。

3）「トルコでスカーフ論争，再燃」『朝日新聞』2002年11月27日。

4）トルコで2007年８月にＡＫＰのアブドラ・ギュル氏が新大統領に選出されたが，世俗主義の守護者を伝じる軍がベールを着用している大統領夫人を軍の公式行事に招かないなど政府と一線を画している。今後，イスラームを表象するベール着用をめぐって政府と国軍との対立，国論の二分化，社会の分断化につながる可能性があり，注意を要する。

5）レバノンでは1932年以降，正式な人口統計が公表されていないため推測の域を出ないが，ウイリアム・ハリスによれば，マロン派が約21%，その他，シーア派が約35%，スンナ派が約24%と分析する（William Harris, *Faces of Lebanon Sects, Wars, and Global Extensions*, Markus Wiener Publishers, 1996, pp.68-76.）。

6）三尾真琴「レバノン社会と若者の意識構造－ムスリムとしてのアイデンティティと葛藤」日本中東学会編『日本中東学会年報』No.11 1996年，359-362頁。

7）三尾真琴「レバノンにおけるシーア派系学校の文化的特質に関する考察－ベールの着用規定と学校の休日にみられるイスラーム性と信仰」『金城学院大学論集（社会科学編）』第２巻 第１号 124-141頁を参照。

8）H. P. ヒッティ（小玉新次郎訳）『レバノンの歴史』山本書店，1972年，128頁。

9）婚姻・相続などの私法分野で宗派に一定の権利を認めるという意味での宗派主義は広く中東諸国でみられる。しかし，国家の基本統治システムとして宗派主義が機能しているのはレバノンだけであり，クーリーは，中東諸国では宗派主義が「公には禁止された私的制度のなかで」認められているのに対し，レバノンでは「公の政策」として位置づけられているところに特徴があると指摘する（Fuad I. Khuri, *Imams and Emirs : State, Religion, and Sects in Islam*, Saqi Books, 1990, p.17）。

10）Fahim I. Qubain, *Education and Science in the Arab World*, John Hoskins Press, 1966, p.345.

11）*Al-Ihsaa Al-Awalie Lil-Aam Al-Dirasi 1996-97*, Center for Educational Research & Development, 1999, p.8.

12）Safia Antoun Saadeh, *The Social Structure of Lebanon-Democracy or Servitude?*, Dar An-Nahar, 1993, p.91.

13）Kamal S. Salibi, *The Modern History of Lebanon*, Caravan Books, 1977, pp.132-135; Michael Johnson, *Class & Client in Beirut－The Sunni Muslim Community and the Lebanese State 1840-1985*, Ithaca Press,1986, pp.12-14. その特徴は，第一に，フランス語が公用語に指定されたことであり，第二に，レバノンの歴史よりフランス史が重視されたことであり，

第三に，ローマ・カトリックに帰属するマロン派を中心にキリスト教系学校が財政面で優遇されたことである。例えば1934年，マロン派系の学校には総額で6,050レバノンポンドが支給されたのに対し，スンナ派，シーア派，ドルーズ派系の学校には三派全体でわずか1,050レバノンポンドが支給されたのにすぎなかった（David C. Gordon, *The Republic of Lebanon-Nation in Jeopardy*, Croom Helm, 1983, p.54）。

14）マッカーシードは，1878年にベイルートで設立されたマッカーシード博愛協会（the Moslem Society of Benevolent Intentions）という教育慈善団体を母体とする。青少年ムスリムに教育の機会を拡げることを設立の主旨とし，同年，ベイルート，サイダ，トリポリに学校を設立した。現在，ベイルートに15校，ベッカーに14校，北部に20校，南部ならびに山岳レバノンに７校を開設し，生徒数は計16,500人である。マッカーシードの活動は，学校運営だけではなく，出版会社の設立やテナント業，スーパーマーケットの運営など経済・営利活動に加え，病院やクリニックなどの医療施設の運営，ムスリムの孤児に対する住宅の貸与や財政的援助，老人ホームやボーイスカウトの建設と設立などの慈善授業にもおよぶ。また，ベイルートに住むムスリムの埋葬を一手に引き受けるなど，さらにその活動を広げている。

15）Michael Johnson, *op. cit.*, p.14.

16）ムスリムの子弟が宗教（キリスト教）の授業を受けるには保護者の同意を必要とする。宗教の授業を受けない生徒は図書室などで過ごす（筆者の聞き取り調査－2001年７月実施による）。

17）ラフィック・ハリーリ氏は，2005年２月14日，ベイルート市内で自家用車に仕掛けられた爆弾により暗殺された（享年60才）。

18）筆者の聞き取り調査による（2001年７月実施）。

19）例えば，イマーン・スクール（Iman School）では前期中等課程から男女別学となり，女子生徒にはベール着用が奨励される。またイースターなどキリスト教系祝祭日が学校の休日として一切採用されていない。

20）その主要な理由は，１）居住地域がベイルートから離れたナバティーエやベッカーなどの地域にあり，情報の遅れをもたらしたこと，２）シーア派住民の大半は小作農で経済的に貧しく，子どもたちを学校へ通わせる余裕がほとんどなかったこと，３）シーア派の宗教指導者にとって近代学校の教育内容が彼らの権限を脅かす存在と映り，近代学校の建設に強く反対したことである（Evelyn Aleene Early, *The Amiliyya Society of Beirut: A Case Study of an Emerging Urban Zaim*, Master thesis, American University of Beirut, 1971, pp.101-103）。

21）ジョン・Ｌ．エスポズィード(内藤正典，宇佐美久美子監訳)『イスラームの脅威－神話か現実か』明石書店，1997年，251頁。

22）ムスタッファ系学校は就学前課程から後期中等課程までの普通学校をベイルートに３校，南部レバノンに２校，ベッカーに１校を開設している。生徒数は約9,500名である（2004年８月現在）。ヒズブッラー系学校とは宗教教育を重視し，男女別学を取り入れ，反米・反イスラエルのイデオロギーを導入し，学校の休日を両校で統一していることなどで共通点をもつ。

23）アマル系学校は1992年に「アマル」の学校組織であるアマル教育協会によって設立された。就学前課程から後期中等課程までの普通学校をベイルートに１校，南部レバノンに５校，ベッカーに２校の系８校を開設している。生徒数は約8,500名である（2003年９月現在）。アマルの「現実的」性格は学校教育にも反映されている。アマル系学校では男女共学であり，教育省作成の教科書を多数採択し，学校の休日はキリスト教とイスラームの祝祭日を同数とする政府案を取り入れている。

24）ヒズブッラー系学校は，アマル同様，1992年に政党に認可された「ヒズブッラー」の学校組織であるイスラーム教育機構（The Islamic Institution for Education and Teaching）によって設立された。就学前課程から前期中等課程までをもち，ベイルートに２校，南部レバノンに６校，ベッカーに３校のレバノン国内で11校を運営し，生徒数約7,000名の規模である（2003年９月現在）。また，イランでイスラーム神学や法学などの研究をおこなっている者の子弟のためにコムでも学校を運営している。

25）桜井啓子『革命イランの教科書メディア－イスラームとナショナリズムの相克』岩波書店，1999年，１頁。

26）下部組織とともに1983年にアメリカ大使館に向けたトラックによる自爆テロを，1985年にはＴＷＡ機をハイジャックし，さらに欧米人の監禁，

知識人・マスコミ関係者の誘拐などをおこなった。

27）*The Daily Star*, 5 Nov. 2001.

28）*The Daily Star*, 17 May, 2002.

29）三尾真琴 前掲書「レバノンにおけるシーア派系学校の文化的特質に関する考察」137-138頁。

30）マバラート協会系学校は理事長がシーア派の最高指導者を意味するアヤトッラーである。もともと孤児の養護・教育のための施設として開設されたが，その後，ベイルートと南部レバノンを中心に就学前課程から後期中等課程までの普通学校を14校，職業学校を２校運営する規模になった。生徒数は13,500名である（2003年９月現在）。学校数と生徒数はいずれもシーア派系学校組織のなかで最大である。

31）ホメイニ師の著した『レサーレ イェ アマリエ』(resale-ye 'amalie)所載，質疑応答番号第2252に，イスラーム法上の義務を負う者の条件として，女性は満９才で成人というくだりがある（『レサーレ イェ アマリエ』の詳細については同志社大学の富田健次氏にご教示いただいた）。なお，『コーラン』には，女性の服装に関する代表的な章句として，第33章（部族連合章）59節，第33章55節，第24章（御光章）31節が存在し，成人ムスリムのベール着用が規定されている。しかし，対象年令やベールの色や形状，着用の仕方など詳細は規定されていない。

32）ジャーファリーエ・スクールは就学前課程より後期中等課程までをもつ普通学校１校と職業学校１校を南部レバノンのスールで運営している。生徒数は約950名である（2004年８月現在）。

33）アーミリーエ・スクールは就学前課程から後期中等課程までを提供する普通学校２校と職業学校１校を運営している。生徒数は約3,500名（2003年８月現在）である。フランス委任統治下，ベイルートへ移住したシーア派住民はイスラームの異端として扱われ，職業選択や信仰で差別的な待遇を受けた（Michel Hudson, *The Precarious Republic: Political Modernization in Lebanon*, Random House, 1968, p.320）。このような環境下，同校はシーア派子弟の教育活動に大きく貢献し，主要なシーア派系学校として地歩を築いた。

34）ベール着用を義務化していない，ジャーファリーエ，アーミリーエ，アマル系学校でも学年が進むとともにベールを着用する女子生徒が増加する。とくに，シーア派の最大の哀悼祭であるアーシューラー期間には黒のベールや黒のイスラーム服を着用した女子生徒が一段と多くなる。このように，ベール着用を義務としていない上記学校でもベール着用自体が禁じられている訳ではない。

35）アーシューラーとは，西暦680年（イスラーム暦61年）シーア派３代目イマームであるフサインとその一行がカルバラーの地でウマイヤ朝軍によって虐殺されたことを悼む哀悼祭をいう。人々はフサインの戦死を殉教とみなし，哀悼祭の期間中，彼らの殉教劇（タアズィーイェ）を上演したり，聖職者によるフサインの物語（ロウゼ）を聞いたり，街頭パレードをおこなったりする。服装は黒色が奨励され，婚礼などの「ハレ」の儀礼は慎まれる。アーシューラー期間中，シーア派の居住地域では服喪一色になる（上岡弘二「イランの民衆のイスラムと社会意識」加納弘勝編『中東の民衆と社会意識』アジア経済研究所1991年，43～83頁を参考にした）。

36）イランにおけるアッタクリーフの儀礼については，Mohammad Reza Sarkar Arani 氏（日本国際文化研究所客員研究員）への聞き取り調査による（2006年10月実施）。

37）例えば，ヒズブッラー系の場合，一般に，儀礼は学校単位でおこなわれず，ヒズブッラー系列のすべての学校との合同でおこなわれ，参加人数は1,000人にもおよぶ。４年生の女子生徒はすべて純白のイスラーム服を身にまとっていた。純白のイスラーム服は，成人ムスリムとして「無垢な意識」で取り組むことを表明する象徴であるという。

38）三尾真琴「レバノンの国民統合政策におけるシーア派系学校の位置づけ－哀悼祭アーシューラーをめぐる歴史認識と信仰に着目して」『比較教育学研究』第33号，日本比較教育学会編，2006年，146-152頁。

39）八尾師誠「イラン」綾部恒雄監修『世界民族事典』弘文堂，2000年，880-881頁。

40）小杉泰「イスラム復興運動の潮流－アラブ諸国における現状と思想的背景」中東調査会編『中東におけるイスラム・ファンダメンタリズム』1987年，12頁。

41）桜井啓子　前掲書，18頁。

42）Michel Hudson, *op. cit.*, p.320.

43）この義務はムスリムの生徒に対してだけではなく，キリスト教徒にも課せられている。男女別

学も同様に初等課程１年よりおこなわれている。

44）Ｔ　レンジャー編（前川啓治　梶原景昭他訳）『創られた伝統』紀伊國屋書店，1992年，10頁。

45）一部のシーア派系学校では，アッタクリーフの儀礼を，１）シーア派の伝統ではないにもかかわらず，伝統行事でもあるかのように喧伝している，２）シーア派の特異性をことさら強調するのは，国民統合を考えた場合，デメリットが大きい，と批判的にとらえる意見もある（ジャーファリーエ・スクール，アリー・シャラファッディーン校長への聞き取り調査による）。しかし，アッタクリーフの儀礼を採用するシーア派系学校は増加する傾向にある。